

浦賀文化

中根東里

江戸時代の哲学者。若くして中国語を学び、日本一の儒者となるも仕官せず、極貧生活を送る。やがて佐野に庵を結び、王陽明の「伝習録」をわかりやすい言葉で説き、人々に慕われた。

もう二十年ほど前のことでしょうか、東浦賀の顕正寺で、小説『血族』で知られた故・山口瞳さんの法要に参列した時、この寺の一角に、江戸時代の哲学者・中根東里がひっそりと眠っているのに気が付きました。それ以来、中根東里と浦賀とのかわりについて関心を寄せてきました。

中根東里は、『横須賀人物往来』に、浦賀に眠る陽明学者として紹介されています。また、最近『無私の日本人』（磯田道史著）に高潔な人柄と天才的な文人として紹介され、文中で「中根東里」という儒者は「徳川開闢以来、稀有の才である」と江戸後期の鴻儒碩学は絶賛し、明治に井上哲次郎が、昭和に安岡正篤が「陽明学者」として若干紹介しているが、今日では忘れ去られた感がある。若し、おのれの名が残らぬよう、作品を燃やして隠れつづけ、自分の存在を消したのだから当然である。伝記もなかったから『無私の日本人』で取り上げた。」と記されています。

中根東里は、江戸時代初期の

元禄七年（一六九四年）、伊豆下田に生まれました。父親の素行がもたらした、決して幸福とはいえない生活の中で、東里の親孝行ぶりは絵に描いたようなものでした。東里の性格や行動から、俗世間には馴染みにくい子と悟り、その行く末を案じた母は、十三歳の時、下田の禅寺に入門させます。ところが東里は、「禅は唐土より渡来したもので、本来の唐音（中国語）で経を読みたい」と思いつき、国内で唐音を学べる数少ない寺のひとつ、宇治の黄檗山萬福寺へ修行の場を移します。好奇心の強い東里は、またたく間に唐音をマスターします。それだけにとどまらず、寺が所蔵する万巻の書物を読みたいと申し出ますが、願いは叶わず、今度は江戸駒込の浄土宗蓮光寺へ仏門修行の場を移します。ここでは読書も許され、修行の傍ら『大蔵経』をはじめ万巻の経典を読破したといえます。

そして、東里の名は江戸市中に知られるようになり、当時、

聖人の道を古代の中国語を通して学ぶことを主張していた儒学者・荻生徂徠の目にも留まりました。しかし、徂徠が唐音に明るい東里を門弟に置くことは、自身の名声を高めるのが目的であり、これを感じ取った東里は、仏道を離れることを決意し、浪人生活に入っていきます。

その後、二十三歳の東里は、加賀国（石川県）金沢の朱子学者・室鳩巢の門をたたきます。四書を中心とした勉学に励み、やがて加賀藩から仕官の勧めを受けます。しかし、学問により俸禄を得ることに嫌悪感を持ち、金沢を後にします。その後、赤貧洗うがごとしという苦境の中、終日書を読みふけり江戸や鎌倉の町角で自分が作ったワラジを売って生計を立てていました。こうして折、東里は『王陽明全書』と出会い深い感銘をうけます。そして、急速に陽明学に傾倒していきます。その後、弟子の懇願により下野国（栃木県）佐野の泥月庵（のちに知松庵）に移り住みました。住居に人々を集めて『伝習録』を誰にもわかる言葉で読み解きました。王陽明と弟子たちとの問答形式をとる『伝習録』をひもとくこと二十年、東里は佐野の人々の尊敬的となっていました。

ここで、東里と浦賀の関係について述べてみましょう。東里の姉は、浦賀奉行所の与力である合原家に嫁ぎ、年老いた母を呼び寄せていました。一方、弟は妻を亡くし、生れたばかりの娘を抱え途方に暮れ、東里を訪ねます。東里は佐野で飢えて死にかけた姪の世話をはじめますが思うようにはいかず、結局、二年養育したのち、浦賀の姉の元に預けることとなります。生涯独身を通した東里も最晩年期には姉の元に身を寄せ、学問の集大成をしたといわれています。明和二年（一七六五年）二月、七十一年の生涯を終えて、母の眠る顕正寺に葬られました。

四書：儒教の経書『論語』『孟子』『大学』『中庸』の総称



中根東里の墓

★参考資料

- 『朝日 日本歴史人物事典』（朝日新聞社）
- 『横須賀人物往来』（公財・横須賀市生涯学習財団）
- 『無私の日本人』（文藝春秋社）
- 『伝習録』（明治書院）



歴史 語りい座・浦賀 三十四

郷土史家 山本 詔一



● 為朝神社 ●

西浦賀の浜町（西浦賀四丁目）の鎮守・為朝神社は、東西浦賀で六つある神社の中で最も新しい神社である。と言っても社殿が完成したのは、文政四年（一八二二年）であるから約二百年も前のことである。

為朝神社には「八郎大明神伝由記」と「八郎大明神故鎮西公廟寝新造募疏」という二点の史料が残されている。「伝由記」は縁起書であり、浜町に為朝像が来由した由来が記されている。「廟寝新造募疏」は社殿を造る際の趣意書である。

「伝由記」を読むと、為朝像が浦賀へ上がったのは寛政十二年（一八〇〇年）三月であった。浜町の（高橋）忠兵衛という人がのどかな春の朝、海辺に行き、春霞の沖合を見ているとどこからか「忠兵衛」と呼ぶ声があった。驚いてあたりを見回したが何も変わったことはない。しかし、なおまた「忠兵衛」と呼ぶ声があった。目を凝らして声のした方向の海を見ていると一体の木像が浮かび上がってきた。

「これは私にどうかしろ」との声であろうと察した忠兵衛は海に入り、この木像を拾い上げた。忠兵衛は木像をそのまま持ち帰ろうとしたが、神仏を冒瀆することを恐れて、浜町の若者宿となっていた地藏堂へ安置した。

これ以後、近郷近在の人で病気がけがの人がこの木像に祈るとその効き目は大なるものがあり、お参りに来る人が切れ目なく続いていた。海から拾い上げて来た木像が為朝像であることがわかると、自然に人々の間にその噂が広まっていった。

江戸時代、為朝は病気、特に疱瘡という病気を退散してくれる神様として信仰を集めていた。疱瘡は天然痘とも呼ばれ、今でも多くの人々に種痘の痕があるように、一度免疫ができれば、この病には罹らないが、種痘のない時代には一定周期で流行するこわい病気であった。為朝が弓を射る力が強かったことから、熱に弱いとされた疱瘡を射る、煎って退散してくれると信じられていた。こうした状態が続くなかで、小七という人が神恵に報いようとして、回りの人々

とともに木像を彩飾したら、ますます像のお顔に徳が増してきた。しかし、まだ神社を造ろうというところまではいっていなかった。

拾い上げた木像が為朝像であることがわかると、為朝とはどのような人物であり、どこから為朝像が来たものであるのか、忠兵衛の子や亀屋藤七、伊勢屋久七、小林金二らが協力してその由来を探ることを始め、大村朝長という人が一冊にまとめた。これが「伝由記」である。

この「伝由記」の完成が、社殿の建築のきっかけとなった。「廟寝新造募疏」には「仮住まいのままであることは、為朝の神力を本當に發揮させることができず、人々にその力を与えることにならない」として、国をあげて、三浦郡の人々がこぞって、裕福な人は一か月の俸給分を、貧しい人は盃一杯分の蓄えを、自分のため、また子孫のために惜しまず、賛同していただければ有難いと綴られている。為朝神社はこうして、浦賀中いやもつと広範囲の人々の力によって建立された。

笑話一題

分館のまわりの電線には台湾リスが走る。毎日忙しいみたいだ。

午後五時になりプールから子供たちが消えるとツバメたちが僕たちの順番だとプールの水面をたたいて遊ぶ。

カラスは夕方になると帰ってくる。今日も楽しかったなと騒ぐ。

玄関の外灯には守宮の夫婦が住んでいる。食事の時間だと、のそのそ起き出す。

展示室の奥の倉庫には巨大な猪の剥製がある。しかも二頭の子供を連れていて。遠い昔をなつかしく思い出しているのだろうか・・・。

しずけさや
プールにうつる

夏の月



浦賀コミセン分館 講座開催のお知らせ

うら散歩

～歴史のまち浦賀を再発見しよう！～

浦賀の歴史を学び付近の寺社を訪れます。普段あまり歩かない裏通りを散策し、いつもと違う浦賀を発見しましょう。

日時 10月17日、24日(木)・30日(水)
9:30～12:00 / 全3回

場所 浦賀コミュニティセンター分館

見学 東浦賀、西浦賀寺社名跡等

※広報よこすか、浦賀 TODAY 等で募集を行います。是非お申し込みください。